

エピローグ

私は2002年度まで横浜にある私立の女子高校で38年間教師をしていました。

私が「倫理」を教えはじめた頃、教科書にこの“狼に育てられた子たち”のことが写真入りで紹介されていました。私は大いに興味をそそられ、このオオカミ少女(ウルフガールズ)のことを世に知らせた3冊の本を読みあさっていきました。すると、そこに登場する人々の心に人間の生き方についての真実が込められていることが分かりました。

そこで私はオオカミ少女の事を授業で紹介したく、シング牧師の養育日記『狼に育てられた子』を基にして、C・マクローの『ウルフ・チャイルド カマラとアマラの物語』、A・ゲセルの『狼にそだてられた子』等を参考にしてこの物語を書きました。そして、2002年までの10数年、年々推敲を重ねながら、授業の10分間ほど時間をさき、年間を通して朗読してきました。

この物語は、完全に狼の習性が乗り移ってしまった人間の女の子二人が、シング牧師夫妻の献身的な養育を受けることにより、気の遠くなるような遅々とした歩みですが、人間性が引き出されていく話ですから、人が人間らしく良く生きるにはということが、手に取るように浮き彫りになるのです。

私の朗読を楽しみにして聞いてくれる毎年の生徒達は、これから自立していく上での教訓をたくさん得てくれました。年度末には、感想文を書いてもらいましたが、数多くの生徒達が、心をこめて感銘を綴ってくれました。それを読ませてもらうことは私の年度末の大きな楽しみでした。

話を聞き始めた生徒達は、オオカミ少女達が収容された部屋で遠吠えをしたり、「ウーウー」とうなり人を威嚇したり、孤児を嘔みつき、怪我をさせてしまったことに驚かされました。

幼いアマラのあまりにも早すぎる死を悲しみました。やがてカマラがシング夫人に慣れだした頃からはじめられた直立歩行をさせていくための夫妻の気の遠くなるような訓練や、言葉を覚えさせる働きかけを心から応援しました。言葉の進歩はなかなかみられませんが、遂に直立歩行が実現した時には、この上ない喜びを感じました。

そして物語の終盤に示されたカマラの驚くべき心の進歩に多くの生徒達は衝撃的な感銘を得ました。それは、猫に襲われくわえられた鳩を救おうと、矢のように走って、取り返して、子供達と心をつなげたり、他の子達より1個多くもらったビスケットを夫人に返したことでした。それらのことによりカマラは皆から信頼され、受け入れられ、もういじめられなくなったのです。

そのようなカマラが示した協調性や協力性や公平さは、日頃ともすると忘れがちなことで、ついそれらに反した行動を取ってしまう生徒達に強烈な反省を求めたのです。

この物語全体を通して生徒達の心を最もとらえたことは、オオカミ少女たちの養育に立ち向かうシング牧師夫妻の懸命な姿でした。そこには真の愛とは何かが示されているのです。それは、「愛は与えられるところにあるのではなく、

与えるところにある」ということです。

そのことは、自分が愛されているかどうかで一喜一憂していた生徒達の人生観を変えてしまうほどのものでした。

また、生徒の中には、真の愛の心に基づいたシング牧師の教育論とは逆の日本の現代の教育の在り方を痛烈に批判する者もいました。

シング牧師の教育の方法論は、子供の悪い面(オオカミ少女の場合は狼の習性)を無理して直そうとすることよりも、個性を引き出し伸ばすこと(オオカミ少女の場合は人間性を育てること)が大切であり、個性を伸ばせば、悪い面は自ずから消えるということです。

その他に、この物語が生徒達の心を強くとらえたことはいくつかあります。それはオオカミ少女達を人間にさせることを努めて目指すシング夫妻と、それに応えて健気に努力するカマラの姿に、人生で、目標をたてて努力することの大切さを痛感したり、オオカミ少女達を狼の巣穴から救出したり、アマラとカマラが病気になった時、シング夫妻が懸命に看病する姿などから人の命の大切さを感じ取ったりしたことです。

私が大変に驚かされたことは、人の子が狼に育てられたら狼になってしまったことから、哲学的思考で、人間の生き方としての大切なことにたどりついた生徒たちがいたことです。その中のある生徒は、犬や猫などが他の動物に育てられても、その動物に成り得ないのに、人間の子供が狼になってしまったことは、人間には何にでもなれるという無限の可能性があるということで、自分もそれを信じて生きていきたいという主旨で、ある生徒達は、今の自分を成り立たせているのは、自分自身ではなく他人だから、これから人を大切にする生き方をしたいという主旨で感想文を残してくれたのです。

私が長年のこの朗読活動を通して最もほっとしたことは、この話を聞いて自分は自殺せずにすんだという感想文を書いてくれた生徒がいたことです。

私の授業を聞いた生徒何千人が残してくれた感想文のごく一部を本書後半に紹介しました。

それらの文面からも分かりますが、この物語は長年の私と生徒達との大切な共有物になっていました。そこでこの度、時代や場所を超えて、世の皆様との貴重な共有物にしたいと、この物語の出版の運びとなりました。

出版に当たりまして、あけび書房の久保則之代表他の多大なご支持とご支援を賜ったことを心より感謝申し上げます。

2014年6月 平井 尚一